

キャラクター名
望月 恋火 (モチヅキ レンカ)

プレイヤー名

シンドローム	サラマンダー		ワークス	中学生	カヴァー	中学3年生
	サラマンダー			年齢		15
オプション	覚醒	憤怒	衝動	憎悪	初期侵食率	35 %
出自	姉妹	経験	継承	邂逅	友人	

	基本値	ワークス	ボーナス	成長	他修正	能力値	HP	41
肉体	4	0	0			4	行動値	15
感覚	0	1	0			1	(非装備時)	15
精神	2	0	2	6	3	13	戦闘移動	20
社会	2	0	0			2	全力移動	40

肉体			感覚			精神			社会		
技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正	技能	SL	修正
白兵			射撃			RC	9		交渉		
回避			知覚	1		意志	1		調達		
運転:			芸術:			知識:			情報: 噂話	4	
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		
運転:			芸術:			知識:			情報:		

武器・コンボ	能力	命中値	G値	攻撃力	射程	メモ
ドラグーン・ハウリング (60↓)	RC	19r+9	-	21		装甲無視。範囲(選択)。災厄の炎+結合粉碎+悪夢
イラ・ディザスター (100~119)	RC	23r+9	-	54		装甲無視。範囲(選択)。災厄の炎+結合粉碎+悪夢+プラズマカノン

防具	価格	装甲	回避	行動	メモ

所持品	
コネ: 噂好きの友人	
情報収集チーム	
制服	
携帯電話	
アクセサリ	
メモリー: 望月火煉 (姉)	
アセティック	

合計装甲: 0 合計回避: 0

ロイス				
対象	感情(pos)	感情(neg)	タイ	消費
Dロイス: 特異点	P	N		
魔王: サタン	P 信頼	N 劣等感		
友人: 都筑京香	P 友情	N 脅威		
	P	N		
	P	N		
	P	N		

最大財産P: 4 残り財産P: 1

スキル名	SL	コスト	タイミング	射程	対象	判定	制限	メモ
ワーディング	★	-	オート	視界	シーン	自動	-	
効果:	非オーヴァードのエキストラ化							
リザレクト	0	1d10	気絶時	-	自身	自動	↓100	
効果:	コスト分のHPで復活							
コンセントレイト	3	2	メジャー	-	-	-	-	
効果:	CL-Lv							
災厄の炎	7	4	メジャー	至近	範囲(選択)	対決	-	
効果:	攻撃力+[Lv×3]の射撃攻撃。対象: 範囲(選択), 射程: 至近に変更							
結合粉碎	5	4	メジャー	-	-	対決	ピュア	
効果:	ダイス+Lv個。装甲無視							
プラズマカノン	5	4	メジャー	視界	単体	対決	100↑	
効果:	攻撃力+[Lv×5]の射撃攻撃。							
閃熱の防壁	5	4	オート	視界	単体	自動成功	ピュア	
効果:	ダメージを[Lv+2]D点軽減。自身に使用不可。1ラウンド1回							
熱感知知覚	★	-	メジャー	至近	自身	自動	-	
効果:	熱を視覚として知覚する。必要なら<RC>判定							
炎の理	★	-	メジャー	至近	効果参照	自動	-	
効果:	炎を作り出す。必要なら<RC>判定							
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								
効果:								

【設定】
 林内市にあるごく普通の一般家庭に生まれ、両親と一つ年上の優しい姉との4人で暮らしていた。何も変わらない日常。昨日と同じ今日。今日と同じ明日。それが続いたのは中学1年生までだった・・・
 学校からの帰り、いつもは友達と帰っていたが今日は特別。姉さんと一緒に母さんの誕生日プレゼントを買うためにショッピングモールに来ていた。
 火煉「誕生日プレゼントはいつも恋火の提案で買っていくわね。今日は何買うか決まってるの？」
 恋火「え？姉さん。私のセンスの無さ知ってるでしょ？」
 火煉「結局私任せなのね・・・女の子なんだから少しはそう言うセンス身につけなと・・・」
 恋火「いいのいいの。私には姉さんがいるから、その辺はノープロブレム！」
 火煉「まったくこの子は・・・」
 ただの仲の良い姉妹だった私たち。ただの買い物。それだけだった。しかし、その日私は世界の裏側を見てしまう。
 ショッピングモールなのに人気がほとんどなくなってきて、訝しげに思った時だ。突如体が重くなり息が苦しくなった。姉さんも同じだったようでとても苦しんでいた。そこに、異形の化け物が現れた・・・何だアレ？そう思った瞬間だった。何が起ったのかわからなかった・・・いきなり目の前に見えた姉さんの顔。そのすぐ後ろにいる化け物。そして、後ろの方に飛び散る紅い何か・・・。化け物は殺ったとても思ったのだろうか。気色悪く笑いながら、またどこかに行った。
 「何だったんだろうね姉さん・・・姉さん？」
 知っていた・・・だが理解しなくなかった。ぐったりと自分にもたれかかる姉。暖かいはずの姉がどんどん冷たくなっていて・・・血を見て理解する。
 「・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・」
 「姉さん・・・・・・・・ごめん。私、おかしいや」
 「姉さんが死んで、今とても悲しい。でも、それ以上に」
 「あいつと自分が憎い・・・あいつが憎くて堪らない！！！」
 「殺してやる・・・殺してやる！！！」
 「うわああああああああああああああああああああ！！！！」